

独自の後染め技術「異色染め」を活かした アパレル商品開発の提案

花之内繊維染株式会社

代表取締役 花之内 建夫さん
専務取締役 花之内 博朗さん



花之内 建夫さん (右)
花之内 博朗さん (左)

ほかにはない染色技術の開発に着手

大正7年、呉服問屋街として名を馳せた室町通からほど近い、油小路通で創業した花之内繊維染株式会社。経営を担う代表取締役花之内建夫さんと、その実弟である染め職人、専務取締役花之内博朗さんとの二人三脚で営んできた無地染め屋です。

お二人に共通するのは、「他社と同じことをやっていたのでは生き残れない」という思いです。昭和35(1960)年、京都の染屋の中でもいち早く合成繊維の染色を開始。和装から洋装へとシフトし、天然繊維はもちろん、様々な合成繊維の織物・編み物を1回の染色で単色に染め上げる無地浸染加工を手掛けてきました。

そして昭和45(1970)年には、大きな転機を迎えます。「その数年前から、当時は難しいとされていたアクリルの無地染めを始めましたが、徐々に大手でもできるようになってきたんです。このままでは淘汰されると思い、国内初のアクリルの抜染プリント技術を開発しました」と博朗さん。抜染プリントとは、ある種の薬品によって色が抜ける染料を選んで無地染めした生地にプリントを施し、「蒸し」と呼ばれる熱処理の工程で、プリント部分の無地染めの染料だけを抜いて白くすることにより、プリントの色だけを発色させるというものです。この技術を駆使した生地を受注は、年間50万メートルに達した時期もありました。現在も、“アクリルの抜染といえば花之内”との定評があり、年間20万メートルを受注しています。この成功を機に、ほかにはない独自の染色技術の開発に、積極的に取り組むようになりました。



抜染プリントを施したアクリル・ウールの複合繊維

アパレル商品開発における 独自技術の活用を提案

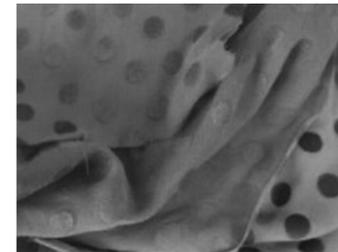
染色加工においては、顧客が指定する色で染め上げるため、事前に、使う染料の種類や配合を見極めるためのテストを行います。大規模な企業を除いては、取引のある染料メーカーに委託するのが一般的ですが、自社ではビーカー用の自動調液機や高圧試験機を導入し、自社で

伝統製品の活用

その実施してきました。そのデータを蓄積することにより、アクリル抜染プリント技術を開発した約10年後には、トリアセートとポリエステルをそれぞれ異なる色に染め分ける技術を開発。現在では、シルク、ウール、レーヨン、テンセルなど11種の糸を用いた70近い組み合わせの2者混、3者混、4者混生地に、異色染めや抜染用の地染めを施し、後染めながら先染めのような高級感を出す技術を確立しています。

今回の事業は、テキスタイルメーカーやアパレル企業に、こうした異色染めの技術を駆使した生地を用いた商品開発の提案を行うものです。その優位性について、博朗さんが解説してくださいました。「素材の異なる糸ごとに染め分ける当社の技術を用いれば、例えば同じジャカード生地も、先染めではなく後染めによって、模様と地柄を様々な色の組み合わせで仕上げるのが可能です。準備工程が長い先染めに比べて小量多品種生産や短納期に対応しやすく、白い生地さえストックしておけば売れ

筋の色だけ増産することもできるため、開発段階でのリスクを低減し、在庫も最低限にとどめられます」。



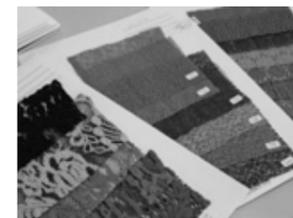
フロック素材での異色染めも展開しています

ホームページや展示会を通じた広報活動を展開

同社の独自技術を広くPRするために、まずはあらゆる素材の糸を用いた複合繊維の生地を10種ほど仕入れ、生地ごとに豊富なカラーバリエーションで染め上げました。次に、独自技術の紹介に特化した自社ホームページを開発。染め上げた生地の画像とその生地の組成を併せて掲載することにより、同社の技術を活かすことで一つの生地からさまざまな表情を生み出せることをアピールしました。また平成25(2013)年には、国内外のバイヤーが集まる展示会『JFW TEXTILE VIEW』にて、独自技術を用いたレース



新たに染め上げたサンプル用生地



手作りでサンプルカタログを制作しています

生地で仕立てたアパレル商品を出品。ホームページや展示会を通して同社を知った企業から問い合わせがあれば、要望に応じて、手作りのサンプルカタログを送付しています。「私には染めのことはわかりませんが、弟が長く地道に取り組んできたからこそ今がある」と建夫さん。その言葉からは、全幅の信頼を寄せ、精力的に広報活動を展開する博朗さんを見守っている様子が伝わってきました。博朗さんはこう語ります。「無地染め屋は1色で綺麗に染めることに力を注ぐもの。そういう意味で私がしていることはアブノーマルです。しかし他社にもできることをやるだけでは、価格競争の渦に巻き込まれてしまう。そうした危機感が、40年以上にわたり開発し続ける原動力となりました」。



『JFW TEXTILE VIEW 2013』の展示

技術の周知と次代への継承を目指して

一つの素材の異色染め技術を完成させるまでには、400回前後もの試験を繰り返します。業務の合間を縫って蓄積してきたデータは、ファイル10冊分にもなりました。「今後の目標は、顧客から、当社なら何か新しい提案をするだろうと思ってもらえるような存在になること。そして、この技術を継承していくことです」と博朗さん。若い職人が興味を持ってくれるよう、時間を見つけては、テストなどを一緒にするようにしているそうです。開発者として、また一染め職人としての博朗さんの挑戦が、同社の未来を切り開いていくことでしょう。

事業概要

花之内繊維染株式会社

http://hananouchi-sensen.kyoto.jp/
代表：代表取締役 花之内 建夫
業種：染色加工業
創業：大正7年
住所：〒604-8245 京都市中京区油小路通六角油小路
町344番地
TEL：075-221-6503